

## 「小さな税金と大きな学び」

福岡教育大学附属福岡中学校

佐藤 佳奈

暑い暑い夏休みに入ってからというもの、私は父方の祖母の家に遊びに行き、お盆休みのほとんどを冷房の効いた涼しい部屋で過ごしていた。そんなある日、祖母から買い物へ行こうと提案があり、外は暑いためあまり乗り気ではなかったが、税の作文も書き終わっていなかったのになにかネタになるものでも見つけようと買い物へついて行った。

ショッピングモールについてから一通り買い物を済ませ、祖母に買ってもらったアイスクリームを手にはせかせかと忙しそうに歩いて回る人々を眺めていた。その中でふと目にとまったのはまだ幼い五歳くらいの女の子だった。アイスクリーム屋の店員さんがレジのカウンターから体を乗り出して困った様子でその子になにか話している。その女の子に目をやると今にも泣きだしそうな表情で少し心配になった。ちょうど手に持っていたアイスクリームを食べ終わった私はその女の子に近づき、「どうしたの？」と声をかけた。するとレジの店員さんが、その子が持っているお金が二十四円足りないのだという。レジの後ろに人がたくさん並んでいたのもあり、私が足りない分のお金を出した。アイスクリームを受け取ってからその子に話をきくと、お母さんに三〇〇円を貰い、きちんとメニューも見えて足りることを確認したはずが何故か足りなかったらしい。なるほど、消費税を見落とししていたのかとその時私は思った。

私はその子に消費税について説明しようと思った。調べてみると財務省のホームページには「商品の販売やサービスの提供に対してかかる税金」だと書いてあった。これをどうやって五歳の子に伝えよう。悩んだ結果、「ものを買うときには書いてある値段より少し多めに払わないといけないんだよ。」と伝えた。するとその子は「なんで？」と聞き返してきた。確かになんでと言われたらなぜなのか私は言葉に詰まってしまい目で祖母に助けを求めた。祖母は「その多めに払ったお金で道路を造ったり、皆が遊ぶ公園ができたりしているんだよ。」と伝えていた。流石大人。頼りになる。それからその女の子のお母さんが探しに来たため、今までの事情を話すと何度も何度も私達にお礼を言って去っていった。私は特に何も説明してあげることができなかつたため、なんだか悪いなあと思っていたが、祖母が「良いことしたね。」と言ってくれたためとても気持ちがすっきりした。

この出来事を通して、私たちが日常的に払っている消費税は、単なる「お金を払う」という行為だけでなく社会全体を支えるための重要な仕組みであるということ、子供に知ってもらうことができた。また、祖母のおかげで私も「税金」について改めて知り、これからも私たち一人ひとりが社会の一員としての役割を果たすためにも、税金について正しい知識を身につけ、税金の大切さを伝えていくべきだと強く感じた。